

**学生・社会人としてサマーセミナーに参加して得られた経験と今後の展望**  
Experience and future prospects gained by participating in summer seminars as a  
student / society

野田康太朗  
Kotaro NODA\*

## 1. はじめに

サマーセミナーとは、農業農村工学会(以下、NN学会)において大会期間中に開催される現役学生を主として企画・運営されるセミナーである。主な目的は、農業農村工学に関わるあるテーマについて様々な角度から議論したり、お互いの研究活動について情報交換しあう<sup>1)</sup>ことである。筆者は大学院在籍時・入社2年目の2016年～2019年の4回に参加した。本稿では、サマーセミナーを通して得られた経験や今後の展望について述べる。

## 2. 参加した体験談・感想

### (1) 学生目線

初めて参加したのは、修士1年の時であり、学会で卒業研究の発表をするだけの予定であったが、先輩や教員の勧めもあり、同大学から複数人で参加した。筆者は当時、生態系分野の研究をしており、どちらかというと少数派の分野と感じていたため、「異分野の学生に研究内容と名前を売る」というような目的が強かった。宮城県開催の回では、東日本大震災で被災した石巻市周辺を見学する現地研修があった。被災の跡は残っていたものの、時期が9月ということもあり、海岸付近で力強く育っている稲の姿を見て、農業農村工学分野が存在する意義や重要性を肌で感じる事ができた。また、サマーセミナーではかならず「グループワーク」があるが、様々な土地や分野から集まった学生が、約2日間活発に議論することにより、濃く厚みのある成果を出せたと感じた。大学に居るだけでは、授業内容や研究について考えることや議論することはあっても、例えば「農業農村工学分野の魅力」について議論することは(しかも学生間で)滅多にない機会であり、とても勉強になった。もちろんグループワークで成果を出すだけではなく学生交流も目的であるため、全力で楽しく過ごすことが何よりも大切である。

### (2) 社会人目線

筆者は大学卒業後、NTC コンサルタンツに入社した。学生ではなくなったものの、社会人枠として幹事から声をかけて頂き、サマーセミナーに参加した。オブザーバーとして、学部や修士の学生に対して議論を助ける側としてグループワークを見守った。どこのグループも学年の壁を超えて「言いたいことを臆することなく言う」サマーセミナーの有るべきスタイルをしっかりと体現していると感じた。筆者は現在、主にダムやため池調査・設計に関わる部署で土質試験や耐震解析の業務をしている。技術となると知識や経験が重要である部分が大いとは感じるものの、会議や打合せで臆することなく発言することの大切さをひしひしと

---

\*NTC コンサルタンツ株式会社 NTC Consultants Inc.

キーワード: サマーセミナー, 若手懇親会, 人材育成

感じている。特にこれからは、多くの企業・団体が成果主義を取り入れ、日本式の年功序列や終身雇用が崩壊することが予想される。そのため、若いうちから積極的に議論の輪に入り、何かを得ようとする貪欲な行動が非常に重要である。さらに2019年から働き方改革も施行され、労働時間の見直しが図られている。実務においても限られた時間の中で成果を出すことが昨今では非常に重要視されている。セミナーにおいても、与えられたテーマと時間の中で、仲間と知恵を振り絞って出した様々な考えから1つの結論を導き出すことは、学生にとって社会に出る前の良いトレーニングと捉えることができる。

### **3. 4度の参加で得られたもの**

グループワークの議論の内容や、研究に関する情報共有は非常に大切だが、一番は学生間の「繋がりや人脈形成」である。セミナー参加者は大学卒業後に各々がその分野の専門家となる。農業農村工学分野に進んだ人間として、今後は、セミナーで築いた関係を活かしたいと本気で考えている。また、学業に対して意欲の高い学生がほとんどであり、自分自身の研究に良い意味でプレッシャーをかけ、モチベーションや成果の向上にも繋がったと感じる。

### **4. これからのサマーセミナーに期待すること**

新型コロナウイルスの感染拡大により、今年度も通常通り開催することが非常に厳しい状況下にある。日本ではコロナ禍において、リモートワークやオンライン会議が急速に広まり、大学の講義も基本的には自宅からインターネットで聴講するようになった。2020年度のセミナーは初のオンライン開催となった。オンライン開催最大のメリットとしては、場所を選ばないという点であり、会場の手配が不要となり参加人数の大幅な増加が見込める。ちなみに、昨年度は2016年の再開後において、最多の人数であった<sup>2)</sup>。また、移動手段や宿泊施設などを利用する金銭的負担も軽減される(学生にとっては大きいのではないか)。これについては、新型コロナウイルスの影響が小さくなった後も続けて頂きたいと考えている(現地参加とオンライン参加を併用する)。さらに、9月の全国大会だけでなく、様々な時期や規模にて開催することによって、「集まること」が身近になり、開催のハードルが大きく下がると考える。サマーセミナーで出会った人脈を活かし、有志で合同ゼミを行うことも可能である。学生間で発表することで、挙手のハードルが下がり質問もしやすくなるため、異分野の学生の発言から、思わぬ発見があるかもしれない。

### **5. まとめ**

このように、学生・社会人として参加したことでセミナー経験の活かし方が多様であることを強く感じた。特に学生時代には、自分より遥かに優秀な学生と沢山出会えたため、「井の中の蛙」にはならず、意欲の高い学生から刺激を受け、向上心を持って研究活動に取り組むことができた。数十年後の話かもしれないが、自分たちが組織を動かすような世代になった時、築いた関係を活かし、お互いを信頼し、農業農村工学を通して社会に貢献できる日々が来ることを心から願っている。

#### **引用文献**

- 1) 中桐貴生 学生自主企画サマーセミナーの歴史, 平成27年度 NN 学会大会講演会要旨集 54-55(2015).
- 2) 鈴木友志ら 農業農村工学サマーセミナー2020 活動報告(投稿中)